

## SARANIP

No. 2

市立函館博物館館報

1971. 7. 1

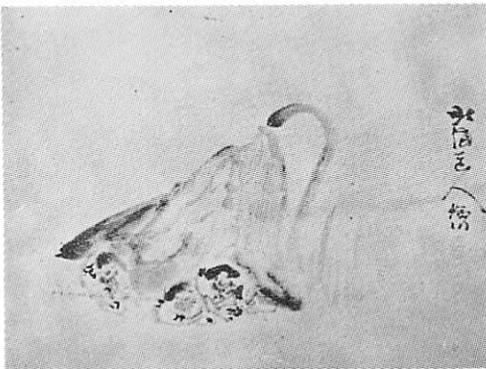
## コロボックル問題と故児玉博士

馬場 脩

明治の中頃から大正の初期にかけて日本考古学界にぎわしたのは、日本石器時代民の問題であった。東大医学部解剖学教室の故小金井良精博士はこれをアイヌ人とし、理学部人類学教室の故坪井正五郎博士はこれをアイヌの口碑に残るコロボックルとして、盛にアイヌ、非アイヌの論争をかわされたものであった。坪井博士のコロボックル論は次の様なアイヌの伝説に基くものであった。

「我々アイヌが北海道に渡って来た時、此所は無人の島ではなかった。我々に先立って此地に、コロロニ（路）ポック（下）ウンクル（人）略してコロボックルという路の葉の下に棲む極めて矮小な人が居った。彼等は我々と全く異った人間で、髭がなく、始は我々と仲善く暮していたが或日物々交換のため覆面をしたコロボックルがアイヌの家の窓の下から手をさし出した所を大勢のアイヌがこれを家内に引き入れて、覆面をとると、それは若い女で、口辺と手甲に入墨があった。それからアイヌの女は、これをまねる様になった。コロボックル等はアイヌの非行に憤って、その後何所かへ去ってしまった云々」と言うのであった。

北海道の縄文土器の末期頃に樺太で栄えていたオホーツク土器を使用した民衆が、利尻、礼文の両島を経て稚内方面に入りこんで、オホーツク海沿岸を南下して、更に千島列島に進出し、占守島迄に及んだ世にいうオホーツク海文化を残した民族があった。



ふき  
路下コロボックル人の図  
アイヌ伝説コロボックルを描いた図  
松浦武四郎作（1818～1888）  
市立函館博物館蔵  
（花光コレクション）

元来オホーツク土器なるものは、ジョウ文土器とは全く別種のもので、その伴出遺物もジョウ文のものとは全く異なる特殊なものであって、此民衆は海洋狩猟民であったのである。特に網走モヨロからの出土遺物は実にさんらんたる物があり、本文化の黄金時代なるモヨロ文化を現出している。他に本邦の蔵（ワラビ）手刀や、大陸渡来の金属器も出土しているのである。

昭和十年頃から北大医学部の故児玉作左衛門博士や伊藤昌一博士は私が北千島に於いて発掘したオホーツク土器人の頭蓋骨に異常な関心を寄せ、その後樺太鈴谷貝塚やモヨロ出土の頭蓋骨の総合調査の結果は全くアイヌ人とは別個の人種で、寧ろエスキモーやアレウトに類似していることを指摘している。

その論旨はアイヌの長頭に対して、オホーツク土器人は短頭でその下顎骨に著しい特徴を示して、下顎枝の幅が非常に広く、その長幅示数の大なることは他に類例を見ないことや、大人はもとより若年小児の間にさえも著しい歯牙の咬耗が見られることである。

コロボックルなるアイヌ伝説の最も重大なる点は、彼等は全く異った非アイヌ人であったことである。樺太に端を発し、北海道オホーツク海沿岸に所謂モヨロ文化を残して千島列島に去ったオホーツク土器人はコロボックルたりしとは断定し難いとしても、彼等は全く非アイヌ人たりしことは敢然たる事実なのである。コロボックルなるものは両博士の研究の結果からしても、単なるアイヌ人の架空の幻の人であったと簡単に片づけられ得ない様な気もする。

昨年末東京の紙上で児玉博士逝去の報に接した。博士は函館中学校の私の一級下で、昭和十二年日本民族協会の第一回北方文化調査には私と北千島占守島に同行したこともあった。計に接して実に追惜の情に堪えないものがある。

（ばば おさむ）

※馬場脩氏は、函館中学校を卒業後日本歯科大学に学び、米国ミズリー州ウェスタン・デンタル・カレッジにおいて博士号を得た。日本人類学会・民族学会会員・英国アンソロポロジー・アソシエーション会員・英国「マン」特別会員

## 考古の窓

函館公園の桜が咲く頃になると、修学旅行の団体が博物館を訪れる。その多くは青森、秋田、岩手県などの東北の学校である。公園の中には、市立函館博物館と市立函館図書館がある。公園の敷地内には縄文時代の遺跡があって、明治の初めに外国人が発掘をしたところでもある。明治12年に完成した旧水産館と明治17年に建てられた旧先住民族館の洋風建築が、いまでも昔の姿で保存されている。その建物のすぐうしろに鉄筋3階建の博物館本館がある。ここには、美術・民族・考古など人文科学系資料が展示されている。

考古の展示室は1階の正面を入ったところにあつて、おもに北海道関係の資料を展示している。展示面積は334.4㎡に固定展示窓と移動展示ケースにそれらが配列されている。常設の展示は、北海道の歴史がわかるようにしてある。函館の考古資料も多いが、修学旅行のように函館だけをみて北海道を離れる人達や市内の人が来客を案内して博物館を訪れる一般の来館者には、北海道という視野から函館の歴史が浮き彫りされるように実物が展示されているほうが、より函館を理解してもらえるのではないかと思う。時代的な流れのなかで、津軽海峡がいつ頃にできたか。旧石器時代人が定住するようになってから、新石器時代をへて歴史時代に移っていくが、何故、北海道に弥生文化や古墳文化が形成されなかったのか。中世の暗黒といわれる北海道で、37万枚もの古銭を備蓄した函館志海苔古銭の謎な

### サラニップ復刊にあたり

市立函館博物館長 石川政治

昭和40年5月、当館々報サラニップの創刊号が発行されました。その後サラニップは諸般の事情により休刊していましたが、この度第2号が発行されることになりました。

現在の函館公園の本館は昭和40年の秋に落成いたしました。サラニップは長年待望の本館落成を記念して発行された意義深い館報であります。

サラニップの言葉の意味については、創刊号に紹介されておりますので省略いたしますが、博物館に関連する小さな事柄、調査のメモ、行事など、小出し袋「サラニップ」にほうり込んでおこうという意図であります。

どんな小さなメモでも長年蓄積されますと、資料として貴重なものになるものです。どうかさゝやかな館報であります。御気軽に、愛読されますようお願いがいたし復刊のことばといたします。

どが実物で示されている。

古物の陳列場から市民教育機関としての性格をもつのがいまの博物館であるが、理想としては、学校教育のカリキュラムに実物教育の単元が組みまれるようにならなければならない



考古学講座

(北海道新聞提供)

らないと思う。私たちの郷土ととか大むかしの人びととが教科書だけで地域社会の歴史が説明されるより、社会教育機関の活用によって教育効果をよりあげることができるのではなからうか。郷土認識にしても義務教育の段階で基礎知識が養われていなければ、博物館の資料がわからないこともある。

博物館市民講座のなかに、考古学講座がある。これは、近頃急に埋蔵文化財の関心が高まったので、関心のある人達が誰れでも聞ける仕組みになっている。開催の期間は、4月から11月まで、毎月第2日曜日に博物館本館で開かれているが、野外で行なう行事は、いつも人気があり、老人や婦人も多く参加している。普及活動に関連して、博物館友の会考古学部会というものがある。これは、会員の組織で、毎月行なわれる考古学講座のあとに月例会が開かれる。

講師との座談会や研究会の会合もある。この部会には、独自の行事計画があつて、遺跡見学会や郷土資料館の見学会を行なったり、博物館で行なう埋蔵文化財調査などに協力もしている。

このほかに、大学の卒業論文など研究のために訪れる人達には、地階の考古研究室で便宜があたえられている。

(学芸員 千代肇)



サラニップ アイスが日常使用した樹皮製の編袋である。

## 特別展の歩み (その2)

年度	名 称	場 所	会期 月/日	出品数	賛助出品者
41	日本古美術展	本 館	4/29~5/22	53点	東京国立博物館・長尾美術館・五島美術館
42	百年記念五稜郭戦争資料展	分館 (五稜郭)	4/29~5/15	100〃	宮内庁・東京国立博物館ほか
〃	肉筆浮世絵名作展	本 館	11/3~11/12	50〃	文化財保護委員会・東京国立博物館
43	戊辰戦争展	東京 東急デパート7階	10/4~10/16	43〃	函館市(五稜郭分館資料)
44	北方民族展	本 館	4/26~5/5	191〃	市立函館図書館・北大人類学教室ほか
45	銭亀古銭と新資料展 1. 函館市志海苔町出土古銭 2. 樺太植物標本 (菅原コレクション) 3. 北太平洋貝類 (高川コレクション) 4. 立体写真鏡外 (小島コレクション)	本 館	4/25~5/31	1,000〃	市立函館図書館ほか
〃	五稜郭戦争新選組始末展、	分 館	7/28~8/16	100〃	東京都町田・日野・浜松・茨城外ほか
46	カラフト・アイス展 (馬場コレクション)	本 館	4/20~5/30	900〃	市立函館図書館・熊野記念館・北檜山町教育委員会

「市立函館博物館友の会」の  
組織と活動

「市立函館博物館友の会」が昨年10月4日設立されて、早くも9ヶ月余りたったが、この経過を述べてみたい。

「友の会」の組織については、数年前より博物館の協力者及び利用者から希望や意見が出されていた。博物館においても、全国で40余りの博物館が友の会を組織しており、ふるくは昭和22年から設置され、有効な普及活動を行っていることなどから種々検討されていたが体制が整わず保留されていた。

昨年6月に当博物館協議会に「友の会の設置」について諮問し、「組織すべきである」との答申を得た。さっそく全国の友の会を組織している博物館のうち、当館と規模、内容などが共通する館及び活発な友の会活動を行なっている館15ヶ所に規約、組織などを照会すると共に、博物館の利用者、協力者などから23名を準備委員として依頼した。

以後準備委員会において規約など協議され、準備委員会案を作成、賛同者を募った。10月4日までに52名の賛同者を得て、当日23名出席し設立総会を開き規約、役員などを決めた。

事業は講演会、研究会、見学会や会報の刊行が主なものであるが、総会で提案のあった、当時函館市日吉遺跡で行なわれていた発掘の見学会を、10月11日友の会のはじめての事業として行なった。

当日晴天ということもあって300名余りの会員や市民の参加があり、発掘担当者の説明を聞いたり出土品などを見まわった。

この見学会を契機とし、より多くの市民に会員となってもらうため会員の募集を始めた。これは友の会が博物館という公共的機関を中心とした会であり、一定の会員だけの閉鎖的団体にならないという配慮と、会員をふやし効果的活動を行なうためである。昨年11月と今年4月の2回市内の学校、各種団体、町会などに案内を出し現在まで350余名の入会申込を受けている。

会の機関誌として昨年11月より「市立函館博物館友の会会報」を毎月刊行し、会員の家庭に送っており、現在9号

になっている。とかく忙しさにまぎれ各種の会合に出席できない会員に毎月の事業予定を知らせ、興味のあるものを自由に選び、参加してもらおうと共に会員の研究や、意見の交換の場となっている。

会員が多くなるにつれ友の会独自又は当館が協力して行なう事業もふえてくと共に、会員の研究や趣味の分野によって、部会において活動する方がよいという意見が出され今年に入り考古学研究部と自然保護研究部が、少しおかれて民俗・歴史研究部が設置された。

講演会としては昨年の11月に文化財月間の催しの一環として、「文化財に関する講演と映画の会」を行ない、以後2度行なっており、研究会は各部会で毎月1回本館又は分館の集會室で、時には他の施設の集會室を使用して行なわれている。

見学会は博物館見学会、遺跡見学会、文化財見学会などで、当館郷土資料館の見学会を第1回目の博物館見学会として、第2回目は札幌にある開拓記念館、小樽市博物館などを見学する会を6月26・27日1泊2日で行ない、以後南北北海道、東北などの博物館見学会をする計画である。遺跡見学会も、好評であった日吉遺跡見学会を2回行ない、春には、考古学研究部によって、函館東部の遺跡めぐりを行ない、更に6月13日には森付近の遺跡見学会を行なった。

また文化財見学会は第1回目として5月16日に民俗・歴史研究部によって行なわれ、バスで函館の西部の建造物を見学して廻った。

博物館界でも取り上げられているが、自然保護の問題を友の会としても研究対処している。

これは、昨年11月末北海道自然保護協会よりの呼びかけで、「自然保護に関する談話会」を開き、同協会に協力すると共に、会員の中より自然保護に関心のある人によって自然保護研究部が設置され、函館や南北北海道の自然に注意を払い、市民の自然に対する認識をたかめようと活動している。

また冬になると博物館から市民の足が遠のいてしまうのでこの時期を利用し、「北国の冬のこどものおそび」を中心とした子供向けの会を今年の2月14日にもった。これには子供の会員や一般会員の子弟など300名余り参加し、冬的生活用具の展示会、冬の子供の遊びに関するお話し会、

雪像づくり、雪の映画会、スケッチ会、雪すべり会などを行なった。この行事で博物館とは楽しいものだという印象を、参加した小中学生にあてたようであり、来年は博物館本館（函館公園）だけではなく、五稜郭分館（五稜郭公園）でも行ないたいと考えている。

最近「函館市日吉遺跡発掘報告書」が博物館より刊行されたが、部数が少ないため研究者が入手できない状況であるので、友の会によって増刷をし、会員及び全国の研究者に頒布している。今後各種の出版物を刊行し、会員や市民に提供することができるものと考えている。

このように友の会は種々の意見や希望によって活動を行っているが、博物館の普及活動とともに検討すべきもの

が多く残されている。

まず当館が総合博物館であり、友の会も各分野の研究や興味を持っている人で構成されている。それは、今後の活動が他の社会教育機関や文化団体との事業と重複することが考えられ、その連絡調整の問題がある。また若い会員の少ないことや、昨年9月に函館市が行なった勤労青少年総合調査にもみられるように、15～24才の勤労青少年の博物館利用率がわずかなものであったこと、そして学校教育との関連においても、児童・生徒会員が一部の学校に片寄っている点など、今後館として考えてゆかねばならぬ大きな問題である。

(学芸員 岡田一彦)

### 最近受入れた資料

- |   |    |  |     |
|---|----|--|-----|
| ◇大砲の弾<br>(尼港事件の際の記念)                                      | 1個 | (白綿尊王攘賊の墨書 94×9×4ツ折)   |     |
| 青竜刀<br>(武昌入城記念 昭和14年11月5日)                                | 1振 | 松前藩親衛隊袖章<br>(白木綿墨書朱印 15×5.3cm)   | 1枚  |
| 藤製籠網笠<br>【菅谷忠男氏寄贈・函館市弥生町8-4】                              | 1個 | 松前錦切 (17.5×6cm)  | 1枚  |
| ◇大型炭取り<br>(明治元年福山藩兵使用「陣中 明誓寺」とあり)                         | 1個 | 17代松前藩主崇広軍装写真(複写15.5×10.7cm)   | 1葉  |
| 標札<br>(「福山藩宿陣」と悪戯書あり)<br>【明誓寺大井住職寄贈・青森市油川町】               | 1枚 | 17代松前藩主崇広平服写真(複写9×6cm)   | 1葉  |
| ◇絵画(月に萩の図)<br>(波響の落款あり。53×106cm)                          | 1軸 | 19代松前藩主修広幼年時代写真<br>(裏に「6年第1月3日写9才松前子爵幼年」とあり9×6cm)                                | 1葉  |
| 砲術免許の巻物<br>(伊東紀之十郎(松前藩士)18×198cm)<br>【伊東厚氏寄贈・亀田郡亀田町字富岡36】 | 1巻 | 19代松前藩主修広青年時代写真<br>(表に「東京浅草公園新開松材堂今津製」とあり台紙付 11.2×7.2cm)                         | 1葉  |
| ◇館誌志士戦没の図<br>(石版刷軸仕立 99×58cm)                             | 1幅 | 【崎崎広根氏寄贈・函館市日吉町1-8-8】  |     |
| 松前藩正議隊袖章<br>(白木綿墨書 22×58cm)                               | 1枚 | ◇テラマチオキナエビスガイ<br>(産地 東支那海 尖閣諸島魚釣島沖)<br>【小菅貞男氏寄贈・東京都台東区上野公園 国立科学博物館内】             | 1個体 |
| 松前藩正議隊鉢巻  | 1本 | ◇サモワール用盆<br>(田中滋造氏が日露戦争従軍の帰途カラフトに上陸、現地でサモワールとともに入手した。)<br>【田中誠一郎氏寄贈・函館市湯川町2-8-8】 | 1点  |
|   |    | ◇銅製茶たく(小山市太郎作)<br>【桜田美津氏寄贈・函館市杉並町20-25】  | 1枚  |

### 博物館日誌抄

46.4.1～46.5.31

- 4・3 石巻市議会議員千葉武志氏来館  
13 特別展「カラフト・アイヌ展」開催準備のため臨時休館 4.19まで  
17 馬場脩氏来函  
18 裏千家流淡交会茶会 於杉花亭  
20 昭和46年度特別展「カラフト・アイヌ展」オープン  
21 博物館協議会委員長 渡辺熊四郎氏来館  
24 第152回植物研究会 30名受講  
国立科学博物館 小菅貞男氏来館  
25 市民考古学講座 50名受講  
28 植物標本(菅原コレクション)整理開始  
5・5 郷土史家 更科源藏氏来館  
9 市民考古学講座 30名受講  
10 ソ連札幌総領事 バンドウーラ氏及び博物館協議会副委員長 原忠雄氏来館  
15 第153回植物研究会 30名受講  
16 利休正伝宗偏流宗夢会茶会 於杉花亭 200名  
陸奥湾海洋調査のため22日まで館長出張  
20 昭和46年度補正予算要求書提出  
24 函館山周遊道路建設打ち合せ会 館長出席

- 25 道開拓記念館事業部長 嶋田賢実氏 外1名来館  
広島水試 荒川好満氏来館  
28 群馬県立博物館学芸課長 阪本英一氏外1名来館  
馬場脩氏帰京  
29 駐日英国大使ジョン・アーサー・ビルチャー氏来館  
30 特別展最終日  
31 平常展準備のため6.7まで臨時休館

### —あとかき—

※ようやく「サラニップ」第2号をお届けすることができました。昭和40年5月に創刊号を出してから6年目になります。今後は年に3～4回刊行します。

※「サラニップ」には函館博物館の事業を紹介するとともに、館員の調査・研究などを載せる予定ですが、ご意見などありましたらお知らせ下さい。

### Hakodate City Museum News

SARANIP—サラニップ— No.2 1971.7.1.発行  
編集・発行 市立函館博物館 (TEL.0138-23-5480)  
北海道函館市青柳町・函館公園内 (〒040)